

Contents

～センター長メッセージ～

「平成26年度のFD活動を振り返って～大学教育の質的転換とFD活動～」・p.1

～授業評価アンケート結果報告～

「授業評価アンケートについて～実施結果と次年度の変更点～」・p.2-3

～全学FD研修会報告～

平成26年度一般教員FD研修会報告・・・p.4

TOEIC Propell Workshop の開催・・・p.5

全学カリキュラム委員会との合同開催イベント実施報告・・・p.6-7

「カリキュラムデザインを考える～カリキュラム・マップによる体系化の試み～」

「カリキュラム・マップ作成に向けたワークショップ」

「国際化に向けた科目ナンバリングの作成～単位互換と学習分析～」

「クォーター制(4学期制)の導入と課題～柔軟なアカデミックカレンダーを考える～」

～FD活動紹介～

各学部等の主なFD活動一覧(平成26年8月～平成27年3月)・・・p.8

各学部・研究科におけるFD活動レポート

<経済学部><経営学部><社会学部><国際地域学部>・・・p.8～9

学生FDチームの活動について・・・p.9

Interview 学修支援室に聞く～学修支援室の現状・課題・展望～・・・p.10

教員の取組 Pick Up<経済学部～初年次・2年次教育におけるTA/SAの活用～>・・・p.11

他大学との交流・・・p.11

「関東FD連絡会」

「全国私立大学FD連携フォーラム(JPFF)」

～FD推進支援室からのお知らせ～

FD推進センター活動報告(平成26年9月～平成27年2月)・・・p.12

「平成26年度のFD活動を振り返って～大学教育の質的転換とFD活動～」

副学長 FD推進センター長 神田 雄一

今年度受審した大学基準協会による認証評価に対して、本年1月に評価結果案が提示されました。幸い本学においては長所として特記すべき事項が多く記述されており、日頃の大学の取り組みが評価委員の方々からも高く評価されたことと思います。

中でもFD活動については、「FD推進センターとFD推進委員会を中心とした全学あげての組織的な活動、学部単位のFD活動の全学的な共有化の取り組み、(中略)大規模大学として一丸となって教育改善に向けて多彩な活動を展開し、大学教育の活性化と教育力向上を図っていることは評価できる」とする評価をいただきました。このことは当事者として素直に喜びたいと思っておりますし、FD活動に日々ご協力いただいている教職員の皆様に改めて御礼を申し上げたいと思います。

本学におけるFD活動は第IV期(平成25・26年度)に入り、各学部あるいは学科レベルでのFD活動が活発化してきたことは我々が求めるボトムアップ的なFD活動が根付いてきたことの表れでしょう。

本年度においても5つの部会を中心とする充実した活動を実施してまいりました。また、関心の高い研修プログラムの実施により多くのことを学びました。特に全学カリキュラム委員会と共催させていただいた、カリキュラムマップの作成に関する講演・ワークショップ、科目ナンバリングさらにクォー

ター制度に関する講演などでは、これからの教育改革を踏まえ、多数の教職員の参加を得て実施されました。また、全学共通授業評価アンケートのフィードバックシステムについても改良を行い、教員にとって有益な情報を提供できるよう、努めて

おります。本年度は特に、語学教育に関するFD活動の充実をめざし、経営学部のご協力を得て、英語の授業参観を実施しました。また、3月には教員のための英語研修プログラムをトライアル実施することとなりました。

さらに、今年度はFD推進センター規程の改正を提案させていただきました。FDに対する考え方の変化に伴って、本学でのFDの定義を見直すと共に、職員のFD推進委員会への参画、学生FDチームの位置付けの明確化などを主眼としました。このことは、従来FD活動が教員を主体として行われていたものから、教育を受ける学生も包括した協働的な展開をする活動へと転換してきていることを意味すると考えております。

本学における教育の質保証を実現するためのFD活動を今後もさらに充実すべく展開してまいります。教職員各位の一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。



平成26年度 授業評価アンケートについて ～実施結果と次年度の変更点～

授業評価手法検討部会長 長谷川 勝久（文学部教授）

平成26年度 授業評価アンケートについて

本学では、教育改善に資する取り組みとして、平成25年度より全学を対象とした「授業評価アンケート」を実施しております。平成26年度は右のとおり実施をしましたので、その実施結果および次年度へ向けた変更点等をご報告します。

実施時期：〔春学期〕平成26年6月30日（月）～7月30日（水）

〔秋学期〕平成26年12月15日（月）～平成27年1月26日（月）

実施内容：〔対象者〕学部所属する専任教員、非常勤講師全員

〔科目〕教員1人につき、専任教員は2科目以上、非常勤講師は1科目以上とする（9名以下の科目、卒業指導等はこのうちに含まない）。

〔結果〕アンケート結果および自由記述は各教員へ配付し、配付後にアンケート結果に対する所見を提出する。

アンケート項目（カテゴリー別）＜図1＞

A. 授業のわかりやすさについて

- 先生の説明は、あなたにとってわかりやすかったですか。
- 使用した教科書、参考書、配布資料などの教材は役に立ちましたか。
- 黒板の板書は読みやすく書かれていましたか。
- スクリーンに投影される文字や図表（パワーポイント、実物投影機、OHP等を含む）は読みやすく作成されていましたか。
- 先生の声は聞き取りやすかったですか。
- 総合的に見て、この授業はわかりやすかったですか。

B. 授業運営について

- シラバス（講義要項）に則した内容の授業が行われていたと思いますか。
- 先生は私語を注意するなど、受講生が講義に集中できる環境を作っていたと思いますか。
- 授業の開始時間終了時間は守っていたと思いますか。
- 総合的に見て、この授業の運営はどうでしたか。

C. 学習成果について

- あなたは講義中に熱心に受講したと思いますか。
- 受講の結果、新しい知識を得ることができましたか。
- 受講の結果、新しいものの見方や考え方を得ることができましたか。
- この授業へのあなた自身の取り組み、この授業から得られたことなど総合的に見て、あなた自身の自己評価はどうでしたか。

D. 授業の難易度と進度について

- 授業の難易度はあなたにとって適切でしたか。
- 授業の進み方のペースは、あなたにとって適切でしたか。
- 総合的に見て、授業の難易度と進度は適切でしたか。

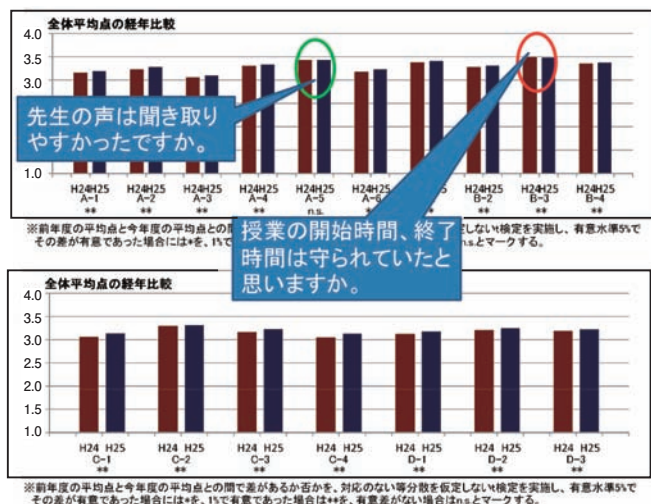
実施結果

本年度も授業評価アンケートにご協力をお願いし、誠にありがとうございました。

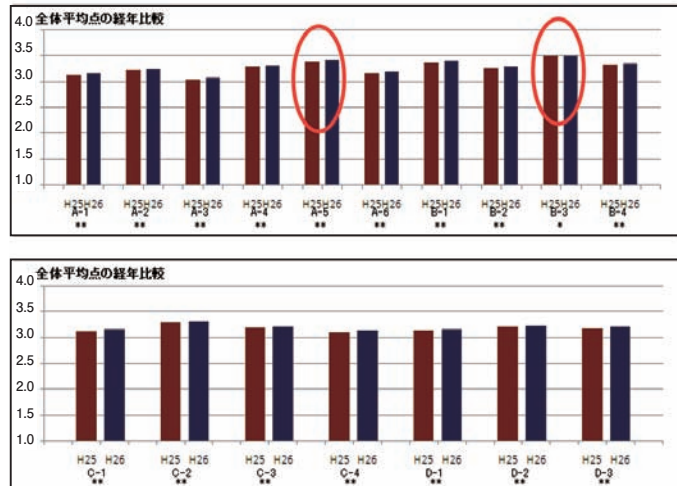
本年度は、全学共通の授業評価アンケートが始まってから2年目を迎え、初めて昨年度との比較ができるようになりました。全学の平成25年度と平成26年度の春学期の結果を図2に、秋学期の結果を図3に示します。

昨年度と比較して、全学の平均では、春学期はアンケート項目A5とB3を除き、残りのすべての項目において有意水準1%で平均値に差があることがわかりました。秋学期は、アンケート項目B3のみ有意水準5%で、あとの項目はすべて有意水準1%で平均値に差があることがわかりました。このことから、東洋大学全体としては、昨年度と比較して、授業改善がなされたとと言えるでしょう。

＜図2＞H25年度、H26年度（春学期）における全学各項目別平均値の推移



＜図3＞H25年度、H26年度（秋学期）における全学各項目別平均値の推移



次年度の変更点

先生方から、授業評価アンケート結果の表示につきまして、様々なご意見を頂きました。それらのご意見を基に、授業評価手法検討部会では、不具合を改善できるよう準備を進めております。紙面の都合上、それらの中で、主な改良点のみご紹介致します。

改良点1)

本年度までは、アンケート項目（図1）のカテゴリA～Dそれぞれにおいて、評価値が高い先生も、相対的に見て改善点が表示されるようになっていました。次年度は、これに加え、当該年度の学部の平均値と比較して、「素点を標準得点に換算した値+1×標準偏差」を超えていれば、次のように表示されるよう改良する予定です。

「評価値は相対的に高く、とてもよい評価です。特に、「 」は大変よいようです。その上で、「 」について改善されるとさらによい授業になるでしょう。」（下線部が追加箇所です。その他の文言は、現在と同じです。）

改良点2)

アンケート項目（図1）の中で、A 2～4およびB 2の4項目について、アンケート項目に該当しない場合（教科書、黒板、パワーポイントなどを使っていない、私語がなかった等）は、回答欄「5.・・・は使っていない」「5. 私語がなかったので注意する必要がなかった」への回答者が80%以上あれば、「この授業は〇〇は使わなかったため、××の設問は分析には含んでいません」の表示が出るように設計してあります。しかしながら、実際にはアンケート項目に該当しない授業であるにも関わらず、その部分が改善点として表示される点が指摘されています。この点を改善すべく、アンケート項目の最後に「15回の授業の内、5回以下しか使用していない場合は『5.・・・は使用しなかった』に回答してください」の1文を追加します。その上で、回答者数の50%以上が、回答欄5に回答した場合に「この授業は〇〇は使わなかったため、××の設問は分析には含んでいません」の表示が出るように改良する予定です。

改良点3)

多くの先生方から素点の分布がどのようになっているかを知りたいとの要望がありました。このことを考慮し、授業評価アンケート全体の分析結果を、従来の表示（アンケート項目A～Dのカテゴリ別総合評価の素点を表示したグラフ（図4））ではなく、図5に示すようなアンケート項目A1～D3の全項目に対し、素点をグラフで表示するように改良する予定です。

< 図 4 > 従来の表示

1. 全体の分析結果

カテゴリ別総合評価

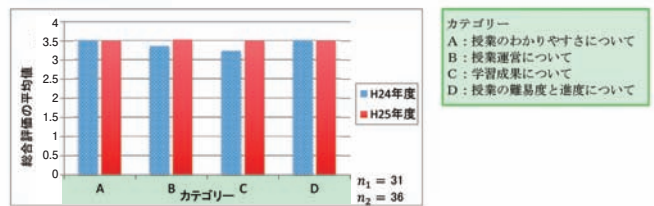


図1 前年度と本年度における各カテゴリ別 (A6・B4・C4・D3) 総合評価得点の平均値の差

【結果の見方】

各カテゴリの総合評価(A6, B4, C4, D3)における得点の平均値をグラフ表示しています。前年度より今年度の方が上がってれば、そのカテゴリは改善されたと考えられます。

< 図 5 > 次年度からの表示

各項目別平均評価値

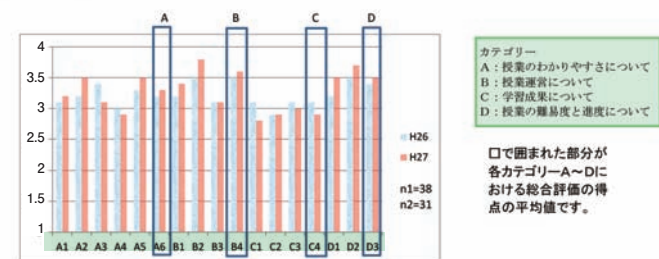


図 前年度と本年度における各項目別平均値の差

n1:前年度の回答者数
n2:本年度の回答者数

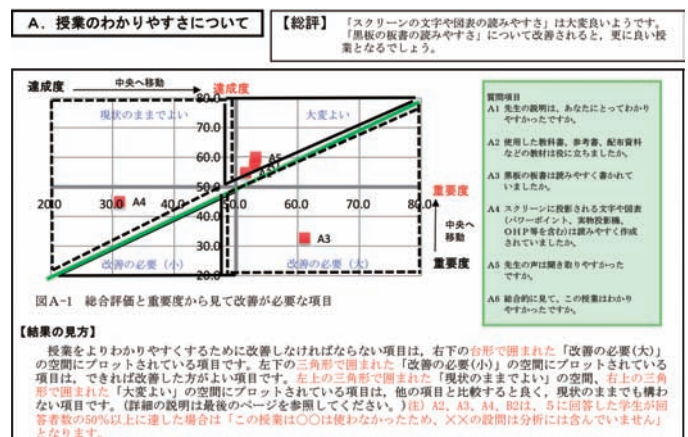
【結果の見方】

各項目における得点の平均値をグラフ表示しています。前年度より今年度の方が上がってれば、その項目は改善されたと考えられます。

改良点4)

アンケート項目のカテゴリ別分析結果と改善点の指摘が異なる場合があることをご指摘を受け、そのようなことが少なくなるように、一部、表示の仕方を図6のように変更する予定です（修正点は赤字表示）。ただし、改善項目を特定する上において、2次元のデータを1次元のデータに重み係数等を使って変換しておりますので、完全に解決することは難しいことをご理解いただければと思います。

< 図 6 > 次年度からの表示



平成 26 年度 一般教員 FD 研修会報告

研修部会長 尾崎 晴男（総合情報学部教授）

開催日時：平成 26 年 12 月 10 日（水）18：10～20：15

会 場：125 記念ホール（白山キャンパス 8 号館 7 階）

Program

司 会：研修部会長 尾崎 晴男

18:10 - 18:15 【開会挨拶】学長 竹村 牧男

講 演

18:15 ~ 19:15

「大規模授業における双方向型授業の
工夫と学習成果の測定・把握」講 演 者：沖 裕貴氏
（立命館大学 教育開発推進機構 教育開発支援センター長）

学内報告

19:15 ~ 19:45

「経済学部 TEES の取組み
（eラーニングを用いた双方向型授業）」

発表者：澤口 隆 准教授（経済学部 経済学科）

巽 靖昭 助教（経済学部）

19:45 ~ 20:10 【質疑応答】

20:10 ~ 20:15 【閉会挨拶】FD 推進センター長 神田 雄一

本年度の一般教員 FD 研修会が、12 月 10 日（水）に白山キャンパス 125 記念ホールにおいて開催された。

まず、沖裕貴氏から「大規模授業における双方向型授業の工夫と学習成果の測定・把握」と題してご講演をいただいた。沖氏は、立命館大学の教育開発推進機構において高等教育学を専門とされ、FD の分野においても活発にご活躍である。

講演は、双方向型あるいはアクティブ・ラーニングと称さ

れる手法の教育的意義から導入された。アクティブ・ラーニングは、受講生の Generic Skills の醸成に効果があり、これらは直接的に評価がしにくいものの、受講生の自己評価等による間接的な手法で評価できると指摘された。

とりわけ聴講者の関心と呼んだのは、アクティブ・ラーニングとは特別な教育手法ではなく、普段の授業内の工夫で取り入れることができるとする、沖先生ご自身が担当する講義（高等教育論）での実践事例紹介である。当該講義は 2014 年度の受講登録数が 269 名であった大規模授業であるが、講義に平行して、受講生が能動的に考える活動を促している。そのひとつは、評価ルーブリック表を示した上で作成させるレポートである。15 回の講義の中で、計 8 回（授業内 4 回、宿題 4 回）を課している。評価ルーブリック表を用いることで単純なミスや修正が極端に減り、より内容に言及した採点を行うことができるようである。もうひとつは、オンライン型アクションペーパーである。授業内外での質問や意見、振り返りを本学の ToyoNet-ACE の立命館版に相当する manaba+R のスレッドに投稿させるものである。受講生の投稿には、教員がコメントを返すと共に授業内での講評にも活用され、とりわけ受講生同士が投稿を閲覧できることが良い効果を生むようである。これらの受講生の能動的取組は、重みづけを行いながら成績評価に反映している。

続いての発表は学内からの報告である。経済学部の澤口隆准教授と巽靖昭助教による「経済学部 TEES の取組（eラーニングを用いた双方向型授業）」と題した講演をいただいた。経済学部では、ミクロ・マクロ経済学などの基礎教育をシステムティックに展開している。まず 300 名を超える規模の受講生に対して講義し、100 名程度のクラスで演習を実施、さらに eラーニングによるドリルを宿題で繰り返させ、ラーニングコモンズの場で補習までサポートする。講演は、大規模講義における、学部独自に開発した学修管理システム（TEES）の活用に絞って行われ、具体的な実践例として 2 項目が紹介された。ひとつは、200 字程度を書かせるオンライン型アクションペーパーで、受講生の書き込みの全文が一覧でき、教員のコメントが付け易いように画面に工夫が成されている。もうひとつは独自開発したクリッカー機能を利用し、授業中に受講生から携帯による投稿を受け付け、授業にフィー



立命館大学 沖 裕貴氏



澤口 隆 経済学部准教授



巽 靖昭 経済学部助教

ドバックを行う支援である。受講生の反応に対して講義で即座に対応できるほか、講義に同席する TA がリアルタイムで補足説明を書き込むなど、興味深い活用がされている。

最後にまとめとして、ディスカッションの時間を持った。さま

ざまな質問や意見が交わされ、大変に充実した研修会であった。本学における教育手法や支援システムの改善等に大いに参考となると考える。なお、当日の資料映像等は、学内ネットワークを通じて閲覧可能であるのでぜひご覧いただきたい。

TOEIC® Propell Workshop の開催

Date: Tuesday, 5 August, 2014 9:30 a.m. 18:00 p.m.

Location: #8204 (class room in 8th building) Hakusan Campus

Facilitator: Assessment Specialists of the TOEIC Programs from ETS

Host: Educational Testing Service (ETS)

The Institute for International Business Communication (IIBC)

Workshop Schedule

09:30 – 12:30	Welcome and Workshop Objectives, Tests Overview, Score Descriptors Learning Objectives
12:30 – 13:30	Lunch Break
13:30 – 18:00	Speaking Scoring Guides –benchmarks and scoring practice Writing Scoring Guides –benchmarks and scoring practice Review Activity Books, Wrap up, Workshop Feedback, Certificate of Attendance

国際化推進および英語教育に関する FD 研修の一環として英語担当教員を対象に、第 4 回目となる TOEIC Speaking and Writing テストを通した指導者向けのワークショップを開催いたしました。

本ワークショップでは、英語教育を通じてグローバル人材を育成する目的のもと、TOEIC や TOEFL、SAT（全米大学入学共通試験）、GRE（大学院入学共通試験）を含む約 200 のテストプログラムを開発している世界最大の非営利テスト開発機関であるアメリカの ETS（Educational Testing Service）より講師を招き、英語のテストにおける「採点基準」や「評価基準」を学びながら、実践的なアクティビティが行われました。

TOEIC テストの概要のみならず、学生の英語コミュニケーション能力の向上に示唆するための指導方法についても学ぶことが出来る貴重な機会となりました。

平成 24 年度に創立 125 周年を迎えた本学は、教育の柱の 1 つに「国際化」を掲げ、「グローバル人財」の育成に力を注いできました。平成 26 年度には、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」に採択され、世界を舞台に活躍できるグローバル人財・「ニューエリート」の育成に向けて、全学的な学生支援体制を構築するとともに、FD の観点からも、教員のための研修会等を提供することで、今後一層の大学全体の国際化を推進してまいります。

なお、本年においても、British Council の協力を得て、英語を専門としない教員を対象として、教員が英語で講義やプレゼンテーションを行うにあたり、論理的かつ分かりやすい方法、学生の理解を助ける効果的なボディランゲージの使い方等を学ぶ「英語で授業を行うための研修会」を以下のとおり開催いたしました（詳細は次号でご紹介します）。

開催日：平成 27 年 3 月 16 日（月） 10:00 ～ 17:00

プログラム：British Council 大学教員向け英語研修プログラム
「講義とプレゼンテーション」コース

専任教員を対象とした本研修会へは、定員を上回る予想以上の申し込みがあり、ニーズに応えるべく、継続的な取り組みを提供できるよう、次年度においても努めてまいります。



TOEIC propell Workshop

< Questionnaire results for the Workshop >

Overall, how would you rate this workshop?



How would you rate the content of this workshop?



How would you rate the facilitator(s)?



Please rate the workshop interactive activities?



全学カリキュラム委員会とFD推進センターの 合同開催イベント実施報告

全学カリキュラム委員会 委員長 杉山 憲司（副学長・教務部長）

今年度、全学カリキュラム委員会とFD推進センターとの合同企画として4つの講演会・ワークショップを実施しました。FD/SDとしての活動に加えて教職協働の一歩となり、本学の教学改革・授業改善が次のステップに繋がる成果があったと実感しています。

運営に際して、お力添えを頂きました神田副学長はじめFD推進センター並びに教務課職員の方々、諸先生方並びに関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。

講演会『カリキュラムデザインを考える～カリキュラム・マップによる体系化の試み～』（4/26）

講師：大阪大学 教育学習支援センター

佐藤 浩章氏（准教授・副センター長）

白山キャンパス 125 記念ホールにて13時より、学外公開として、内外合わせて101名の参加者を得て開催しました。佐藤氏には大学教育にかかわる3つの方針（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）の体系性とその検証方法をはじめ、カリキュラム・マップ等のカリキュ

ラム設計に関わる手法と意義について、本学の現状と他大学の事例を踏まえて、解説して頂きました。

特に、ディプロマ・ポリシーと授業科目との関連性を視覚的に示すカリキュラム・マップの作成方法について、また、本学の実際のディプロマ・ポリシー、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを例示して、それぞれのポリシーのチェックポイント、学ぶべき点、改善が必要な点などについて、参加者からの意見と感想等が述べられ、佐藤氏から具体的なアドバイスを頂きました。

ワークショップ『カリキュラム・マップ作成に向けたワークショップ』（8/1）

講師：大阪大学 教育学習支援センター

佐藤 浩章氏（准教授・副センター長）

：大阪大学 教育学習支援センター

大山 牧子氏（特任助教）

：成蹊大学 高等教育開発・支援センター

勝野喜以子氏（准教授）

本ワークショップは、白山キャンパス 125 記念ホールにて13時より、4月の講演会の実践編、即ち、学科単位のセミナーとして企画されました。全学部の教員と職員が一堂に会しての初めての教職協働体験となり、総勢154名が参加してのワークショップとなりました。

ワークショップ前半は佐藤氏から「3つのポリシーの見直しとカリキュラム・マップの作成方法」と題した解説を頂き、後半は

「カリキュラム・マップの作成ワークショップ」として、学科グループ、基盤教育ワーキンググループの合計36のチームに分かれ、それぞれのカリキュラム・マップ作成に取り組みました。

参加者は、約3時間のワークショップを通じて、学生に分かり易くカリキュラムを明示することをテーマに熱心な議論を展開し、模造紙に付箋用紙とマジックペンを使って、それぞれのカリキュラム・マップを作成し、渾身の作を完成させていきました。その後、各グループが作成したカリキュラム・マップを相互に学び合うポスターセッションを行い、作品にコメントをつけ合った後に、佐藤氏をはじめ、講師の先生方による講評が述べられ、盛況のうちに会は終了しました。

最後に2号館16階のスカイホールにて懇親会が行われ、講師の3名の先生方を交えて、参加者それぞれが意見交換する機会を得ました。



カリキュラム・マップ作成に向けたワークショップ

講演会『国際化に向けた科目ナンバリングの作成ー単位互換と学習分析ー』（11/21）

講師：弘前大学 21 世紀教育センター

田中 正弘氏（准教授）

白山キャンパス 125 記念ホールにて 10 時 40 分より開催し、学内教職員 71 名が参加しました。講演会は、カリキュラムの学問分野や難易度を明示する「科目ナンバリング」に期待され

る効果（具体的には、国内外の大学との単位互換が容易になり、カリキュラム・ツリーの分析を通じて学問分野や難易度・位置づけが明確になる）と、科目ナンバリングの学内統一ルール（具体的には、科研の細目表を用いる利点・欠点）について解説し、教育プログラムの体系化に極めて有効であると結んで頂きました。また国際的な学位取得プログラムとしてのダブルディグリーやジョイントディグリーについても解説頂きました。

特別講演会

『クォーター制（4 学期制）の導入と課題～柔軟なアカデミックカレンダーを考える～』（12/13）

開催日時：平成 26 年 12 月 13 日（土）13：00～15：20

会場：東洋大学白山キャンパス 6B14 教室（6 号館地下 1 階）

Program

講演 1

開学時からのクォーター制度設計と運用しての課題

高知工科大学 坂本 明雄氏（名誉教授）

講演 2

大規模大学におけるクォーター制の考え方と運用

ー早稲田大学の事例ー

早稲田大学 田中 愛治氏（グローバルエデュケーションセンター長）

白山キャンパス 6B14 教室にて 13 時より開催し、学外公開として、内外を合わせて 87 名が参加しました。はじめに、坂本氏から、「開学時からのクォーター制度設計と運用しての課題」と題して、高知工科大学が開学当初から導入している学年暦の考え方やクォーター制の時間割編成方法などについて、主体的な学びにつなげる一つの仕掛けとの視点から実際の講義スケジュールと時間割をもとに解説頂きました。さらに、同大学教

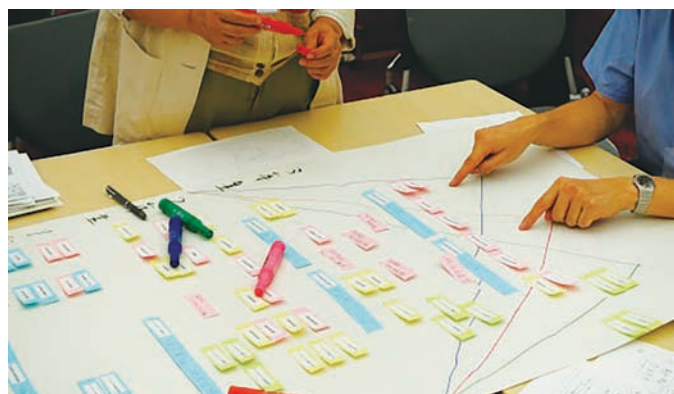
務部竹田真氏により、具体的に必要とする準備や支援内容と課題について説明して頂きました。

次に田中氏より「大規模大学におけるクォーター制の考え方と運用ー早稲田大学の事例ー」と題して、先ず、なぜ 4 学期制を導入したかについて、学生が正規のサマー・スクールへ留学するため、また早稲田に留学した学生のためであり、先生方にとっても第 2 クォーターと夏期休暇を繋げることで自由度が増す効果は大きいと、導入の目的と意義について話されました。引き続き、大規模大学ならではの課題について、学年暦や留学制度の様々な工夫についても解説して頂きました。クォーター制を前提に、早稲田大学が展開する留学制度や「サマーセッション」などの海外体験プログラム、ギャップ・タームの学生による主体的計画、海外からの留学生の受入増加に向けた課題等、国際発信できる人材育成に向けたグローバル教育についても説明して頂きました。

現時点で振り返ると、ワークショップ等の実施後に、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」事業への採択が決まり、東洋大学のグローバル化／国際化にとって、科目ナンバリングとクォーター制は不可欠な要件と成っていることを付言しておきたいと思います。



カリキュラム・マップ作成に向けたワークショップ



各学部等・研究科における FD 活動（学内）

秋学期 各学部等の主な FD 活動一覧（平成26年8月～平成27年3月）

平成26年 8月4日(月)	社会学部 FD 推進委員会 勉強会（社会学部）	11月19日(水)	【講演会】大学等における障害学生支援 ～筑波大学を中心として～ （ライフデザイン学部）
9月11日(木)	【講演会】授業設計とシラバス作成 ～学生中心の教育の視点から～（経済学部）	11月20日(木)	【講演会】大人数講義のための30のティップス ～学生の学習態度が変わる簡単な工夫～ （経済学部）
9月24日(水)	【講演会】アクティブ・ラーニングの理論と実践 ～授業づくりとカリキュラム開発の視点から～ （文学部）	12月3日(水)	シラバス入力についての （具体的事例による）説明 （ライフデザイン学部）
10月1日(水)	実験安全講習会（板倉キャンパス）	12月12日(金)	【講演会】「3つのポリシーの作り方」から カリキュラム構成を考える （板倉キャンパス）
10月29日(水)	【講演会】大学におけるメンタルヘルス ～学生と教員のコミュニケーションを中心として～ （板倉キャンパス）	平成27年 1月22日(木)	【講演会】 Content-based Teaching In Action （国際地域学部）
11月6日(木)	学生との意見交換会（経済学部）	2月12日(木)	【講演会】Food Sources and You CLIL（内容言語統合型学習理論）に もつづいた講義（国際地域学部）
11月17日(月) ～22日(土)	英語の授業公開（経営学部）	2月18日(水)	【講演会】高等教育と21世紀型スキル ～地滑りの授業改善のための slippery slope～ （文学部）
11月19日(水)	学生との意見交換会（ライフデザイン学部）		

経済学部における FD 活動

■ ■ ■

千明 誠（経済学部 准教授）

経済学部では、毎年、FD 会合（年2回）、FD 講演会（2回）、学生との意見交換会等を実施している。ここでは、FD 講演会と学生との意見交換会について報告する。

9月11日（木）に第1回FD講演会「授業設計とシラバス作成～学生中心の教育の視点から～」を開催した。本テーマは昨年度のFD会合でシラバス作成が議論されたことによる。講演会は3部構成で、第1部では、帝京大学高等教育開発センターの井上史子教授をお招きして、「授業設計とシラバス作成」について米国の大学の事例を基にご説明をいただいた。第2部では、本学FD推進センター学生FDチームの学生（2名）より、「学生から見たシラバスと授業」について意見を発表していただいた。第3部では、全体ディスカッションを行った。

第1回FD講演会を受けて、11月6日（木）に学生との意見交換会を開催した。まず、本学FD推進センター学生FDチームの学生（3名）をファシリテーターとして、学科ごとに教員と学生がシラバスに関連して教育活動全体について意見交換を行った。その後、各内容を全体報告で共有した。FD講演会と学生との意見交換会をリンクさせることで、「学生とのコラボ」を一步進めることを意図したが、新たな課題も浮き彫りになったように思われる。

また、11月20日（木）に、大阪大学教育学習支援センター副センター長・大阪大学全学教育推進機構准教授の佐藤浩章先生をお招きして、第2回FD講演会「大人数講義のための30のティップス～学生の学習態度が変わる簡単な工夫～」を開催した。教職員を大人数教室の学生に見立てた講義形式による実践的な内容で、参加者からは好評をいただいた。

経営学部の英語公開授業

■ ■ ■

幸田 浩文（経営学部 教授）

経営学部では、これまでもFD活動の一環として英語授業を公開してきた。平成26年度は、白山キャンパス2号館3階の講師控室にて、情報を公開するとともに、グループウェア上で全学に周知することで、英語に関心をもつ、また国際的背景をもつ教員にもこの案内が行き届くよう努めた。

本公開授業は、2014年11月17日（月）から11月22日（土）まで、本学部の専任教員4名により次の5つの教室で実施された。

- ①「英語ⅡB」金曜2限（1311教室）－新井恭子准教授
- ②「英語ⅠB-2I」月曜1限（4B11教室）－A・マッケンジー専任講師
- ③「ビジネス・コミュニケーションB」火曜2限（1312教室）－有光奈美准教授
- ④「経営実用英語入門B1」木曜6限（3304教室）－藤尾美佐准教授
- ⑤「GBCセミナー」金曜4限（3503教室）－藤尾美佐准教授

ここでは、以上の授業の中から、「GBCセミナー」について紹介する。GBCセミナーは、グローバルなビジネスに重要となるコミュニケーションに注目し、セミナー形式を通じた実用的な英語教育を目指している。今回、学生は英語のみを用いて「効果的なビジネスミーティングをいかにして行うか」を実践した。教員からの英語のコメントや質問に対して学生たちは全て英語で答え、当日のビジネスミーティングのテーマであった東京国際映画祭の魅力や今後の課題について議論を発展させた。

なお他の「英語ⅠB」「経営実用英語入門B1」「英語ⅡB」においても、経営学部FD委員に加えて、他学部の教員、副学長、FD推進支援室や、広報課、スポーツ振興課の職員も参観に訪れた。



社会学部 FD 研修会「単位僅少者への対応」

■ ■ ■

栗山 和子(社会学部 教授)

社会学部では、2014 年 12 月 15 日（月）判定教授会終了後 16 時 30 分から 1 時間弱、2 号館 16 階スカイホールにおいて、学部 FD 研修会を開催した。研修会のテーマは、「単位僅少者への対応」である。

2014 年 3 月末から 2014 年 4 月にかけて、社会学部での初めての取り組みとして、全学科で単位僅少者と教員との面談が実施され、単位僅少の理由についてのアンケート調査が行われた。そのアンケートの集計結果に基づき、FD 推進委員会で単位僅少者への対応を検討した結果、まず、各学科の現状と課題の把握を行うことが必要であるということから、今回の FD 研修会のテーマを決定した。

FD 研修会では、社会学部を構成する第 1 部 5 学科と第 2 部 2 学科から教員が 1 名ずつ（ただし、社会福祉学科は第 1 部・第 2 部あわせて 1 名）、学科の単位僅少者への対応と課題について報告を行った。その結果、どの学科でも必修のゼミで欠席が多い学生に対する声掛けなどを行っていることや授業に出てこなくなった理由（寝坊・サボリ癖）が共通していること、第 2 部は第 1 部とは異なり経済的な理由（アルバイトや仕事）も大きいことなど、現状について全員の教員が共通の認識を持つことができた。また、寝坊・サボリ癖が理由の場合、本人の生活態度に起因するため、教職員からの小まめな声掛けや面談だけでは対応に限界があり、解決しにくい課題であることも明らかになった。

FD 研修会終了後、複数の教員から、学科ごとの現状と課題を共有し、共通点と相違点を認識できて良かった、いろいろな話が聞けて面白かった、という意見が聞かれた。FD 活動として一定の意義があったと考えられるが、一方で、学部としての単位僅少者への対応は、まだ、始まったばかりであり、次年度以降も引き続き面談や声掛け等の地道な取り組みを続けながら、特に単位僅少学生の多い第 2 部の学生への対応を検討していく必要がある。



国際地域学部における FD 活動

■ ■ ■

和田 尚久(国際地域学部 教授)

国際地域学部では、2014 年度には 2 回の英語 FD 活動を行った。第 1 回目は、2015 年 1 月 22 日（木）の 17 時～18 時 30 分に、白山キャンパス 1 号館 1605 教室で行った。講師は、Clara Birnbaum（バーンバウム）先生で、テーマは Contest - based Teaching in Action であった。12 名の教員が参加した。第 2 回目は、2 月 12 日（木）13 時～14 時 30 分、場所は第 1 回と同じ白山キャンパス 1605 教室において、Richard Pinner（ピナー）先生を講師として迎え Food Sources and You をテーマに行った。

第 1 回目の英語 FD の講師であるバーンバウム先生は、立教大学で 15 年、明治大学で 10 年教鞭を取った経験がある。バーンバウム先生は、まず模擬授業を行い、それに関わるディスカッションを行った。第 2 回目の英語 FD の講師をお引受け頂いたピナー先生は、上智大学文学部英文学科の助教を務めている。ピナー先生は内容言語統合型学習（Content and Language Integrated Learning : CLIL）に沿った内容である。最初の 60 分は“Food Sources and You”の授業を行い、残りの 30 分を質疑応答に充てる。この授業では、まず食糧に関する知識を与えて、それに対する意見を求める形で、知識を与えつつ受講者の関心を引くように工夫されている。ここで使用される CLIL という手法は、ヨーロッパで活用されている手法で、日本では上智大学が力を入れているが、本学のグローバル化を牽引するグローバル・オフィスを擁する国際地域学部では、この種のプログラムを一層充実させていく予定である。なお、2014 年度のこれらのプログラムは、本学部の子島教授が担っていることを申し添えておく。



平成 26 年度秋学期 学生 FD チームの活動について

FD 推進センター学生 FD チーム代表 齊藤 克弥(社会学部社会学科 2 年)

我々学生 FD チームは、春学期に引き続き「学習者の目線に立った教育改善に向けた取り組み」を展開しています。学内における秋学期の活動は、「履修制度に関する改善提案」の作成、「第 2 回東洋授業への声コンクール」の開催、「東洋大学サミット 2014 冬～東洋人教育大会議～」の開催といった企画を行ってまいりました。このほかにも、経済学部の FD 講演会にて意見発表を行うなど、学部での FD 活動にも参加しました。また、学生 FD 活動に取り組む、関東圏の大学との連携を深めようと、10 月には「2014 年度学生 FD フォーラム」を学生 FD チーム主催で開催いたしました。

「2014 年度学生 FD フォーラム」では 12 大学約 50 名の参加を得て、今後「学生 FD 活動」を継続させ、更なる発展を図るための議論を繰り広げました。このフォーラムでは「学生 FD 活動」が各大学で大きく広がりつつあることを実感するとともに、各大学ともに「学生スタッフの確保」が課題となっており、今後我々学生 FD チームでも解決していかななくてはならない問題であるということが再確認されました。

12 月に初の試みとして開催した「東洋大学サミット 2014 冬～東洋人教育大会議～」は、本学の学生・教員・職員が三位一体となって、本学の教育について考え合うとともに、様々な学部の視点から、本学の課題について検討することを目的として行われました。

本サミットでは、外部講師として法政大学理工学部教授・教育開発支援機構 FD 推進センター FD 推進プロジェクトリーダーの川上忠重氏をお招きし、「学生 FD ってなに？学生教員、職員による学びの充実」というテーマでご講演をいただき、参加者間で学部の垣根を越えた議論を展開することができました。

学生 FD チームの活動には、皆さんからの「声」が重要です。学生の立場を活かし、大学の教育に私たちの声を伝える活動をしていきたいと考えております。2015 年度も、様々な活動を通して「声」を集めて分析を行い、教職員の方々と連携しながら「学生の主体的な学びの確立」につながるよう、取り組みを展開していきたいと考えています。



東洋大学サミットの様子

Interview 学修支援室に聞く ～学修支援室の現状・課題・展望～

寺門 弘一(教務部付課長[学修支援室担当])

市東 あや(学修支援アドバイザー・文学研究科D2)

聞き手 宮原 均(FD推進委員・編集部会長)

本企画は、FD推進委員・編集部会長である宮原法学部教授をインタビューとし、大学のFDに関わる取り組みや活動について代表者と対談を行うものである。

今回は平成26年3月に開設された白山キャンパスの学修支援室の活動について、教務部担当者と学修支援アドバイザーを務める学生にお話を伺った。



宮原先生



寺門課長(左)と市東学修支援アドバイザー(右)

宮原：学修支援室が開設され1年が経過しようとしておりますが、当初の目的と、その目的がどの程度達成されたのか、課題は何か、ということについてお話を伺いたいと存じます。

寺門：学修支援室では、「大学での学び方」を重視しています。高校と大学では授業の履修方法や修得しなければならない内容もかなり異なります。高校までの勉強の仕方を変えていかなければなりません、これをスムーズに行えない学生がかなりいると思います。

この点をサポートし、また学修能力を高める方策についても別に進めています。

宮原：具体的にはどのような支援をなされていますか。

寺門：まず、主に大学院後期課程のTAを学修支援アドバイザーとして採用し、学生の相談に対して個別に対応を行い、多様な学生の疑問に応じられるようにしています。また、語学系資格取得対策、文章力UP、プレゼンテーション力向上等の各種講座の開講、さらに、書籍の貸出、ゼミ発表準備など学生の主体的な学びを促進するための「場」の提供としてプレゼンテーション・ルームの貸出しを行っています。これらの運営補助として職員1名が配置されています。

宮原：学生の相談で需要の高い分野はどのあたりでしょうか。

寺門：レポート、論文対策などの文章力、外国語、学習方法など授業に関する相談が多くなっています。また、他部署の協力を得て、情報リテラシーに関する支援として、「ワード」「エクセル」等の操作に関する講座を開講しました。次年度は学修支援室主体で開講し、他の開講講座と開催のタイミングを合わせるなどにより、受講効果を高めたいと考えています。

宮原：学生の相談に対するアドバイスの姿勢はどのようなものですか。

寺門：大学での学びを理解していく上での基礎力を養い、全体の「底上げ」をはかることを重視しています。もっとも、個別の学生に対して、家庭教師のように接するのではなく、あくまで方向性をアドバイスすることになります。

宮原：入学時点で学修への意識が低い学生や、引きこもり等の精神的に不安定な学生の学修支援について特別な配慮はなされていますか。

寺門：前者に対する特別なプログラムは、現在のところ提供していませんが、支援方策は課題として認識しています。次年度は、「大学での学び」についての講座も実施する予定です。後者については、学生相談室への相談が多いかと思いますが、学修の遅れと精神的不安定はかなり重なっ

ており、相談によって誤った方向へ導くことがないよう学生生活関連部署と連携をとりながら対応しています。

宮原：学修支援アドバイザーとして、実際、どのような相談を多く受けていますか。

市東：文章の書き方やプレゼンテーションの方法についてが多いです。また、授業で出されるレポート課題等について、どのように調べたらよいのか、何をどうまとめたらいのか、スタートのところでつまづいている学生が少なくありません。

宮原：授業で課題を出す先生方も、学生のこのような実態を念頭に置いて授業を展開する必要があるそうですね。ところで、私の経験ですが、サポートを積極的に受けにくる学生は実はサポートは必要ない、逆に、その必要のある学生は受けに来ない…という皮肉な現実がありました。このあたりのところはいかがでしょうか。

寺門：今年度の講座参加、施設利用を含めた学修支援室の利用者は約2500名、個別相談利用者は260人程でしたが、需要はもっとあるはずで。そこで、「利用しやすさ」を常時考えていますが、相談に対して「割り切らない」「打ち切らない」をアドバイザーに心掛けてもらっています。学修は様々な悩み等と密接に結びついていることが少なくありません。話を聞くことによってコミュニケーションを図り、足がかりをひとつ築くことが重要であると考えています。

市東：実際に、深夜のアルバイトで勉強時間がとれない、サークル活動で燃え尽きてしまって何もする気が起きない等の相談もあります。こうした生活面にわたる話にも、先輩として耳を傾け、アドバイスすることも学修支援アドバイザーの業務内容であると指導されています。

宮原：その他、利用者や利用状況に関して気がつかれたことはありますか。

市東：授業を担当している非常勤講師兼務の学修支援アドバイザーに対して、受講者が授業の延長のような形で接したり、ネイティブのアドバイザーに語学を習ったり、また、卒業論文のテーマや執筆スケジュールを相談しにくる学生もいます。講座への参加は、イブニングコースの学生にも熱心な方が多くみられました。

寺門：現在、学修支援室の開室時間は10時～18時ですので、18時過ぎに授業の始まるイブニングコースの学生への配慮も課題です。今年度の講座は6時限に開講するなどの工夫をしました。

宮原：学修支援室の目的が「大学での学び方」について学生に徹底し、全体の「底上げ」をはかることによって更なる発展を目指すことにあることを改めて確認いたしました。そのためには、各部署との連携の必要性和学生利用の促進方法等が課題であることも分かりました。本学の先生方にも学修支援室の存在や役割を広く周知して、利用を促してほしいと思います。本日はどうもありがとうございました。



学修支援室担当の皆さんと

教員の取組 Pick Up

経済学部～初年次・2年次教育におけるTA/SAの活用～

上村 一樹（経済学部 助教）

私は現在、「経済学入門演習」および「マクロ/ミクロ経済論演習」、そして「経済学部サポートデスク」という3つの場において、TA/SAを活用しており、講義・講座運営の大きな助けとなっている。

まず、「経済学入門演習」「マクロ/ミクロ経済論演習」は、対応する講義科目（親科目）の内容を元にした演習問題を解くこと



経済学部サポートデスク風景

で、親科目の内容理解を深めることを目的としている科目である。独力ではなかなか問題を解くことができない学生もあり、それらの学生に対しては随時助言・指導を行う必要がある。しかし、数学が不得手で基礎的な計算方法から復習しなければならない学生もいるため、教員1名では数十名の履修者すべてに対して十

分に対応することは難しい。「経済学入門演習」「マクロ/ミクロ経済論演習」では、1教室あたり数名のSAがいることにより、学生に対する十分な対応が可能となっている。また、教員に質問するよりも年齢が近いSAに聞く方が気楽に聞ける場合もあるようで、そういった意味でもSAの存在が助けになっている。

次に、「経済学部サポートデスク」は、必修科目である「経済学入門」や、選択必修科目である「マクロ/ミクロ経済論」の単位を落としかねない状況にある学生を対象にしている。そのため、「経済学部サポートデスク」は基礎的な学習を徹底的に行う場となっており、講義科目、演習科目、e-learning課題などで取り上げた様々な問題について、分からないことが一つでも少なくなるように、反復的に学習させている。中には本来は対象外（単位を落とす可能性は極めて低い）であるにもかかわらず、自発的に訪れて勉強する学生もあり、そうした学生からはやや高度な質問が出てくることがある。「経済学部サポートデスク」にはSA1名とTA1名が勤務しているが、TAがいることにより、高度な質問に対しても対応することが可能となっている。

他大学との交流

「関東圏 FD 連絡会」

第16回

日時：2014年10月1日（水）

場所：東洋大学 8号館7階125記念ホール

第17回

日時：2015年1月28日（水）

場所：立教大学 池袋キャンパス立川記念館1階会議室

平成21年度より青山学院大学、法政大学、立教大学、東洋大学のFD担当者が集まり、同規模の私立大学が抱えるFD活動の問題解決と情報収集を目的とした意見交換会を開催しております。本学にて行われた第16回関東圏FD連絡会では、「授業評価アンケートの実施および結果の公表方法」について活発な情報交換がなされ、本学も得るところが多くありました。第17回の連絡会では、各大学にて実施する教員のための英語による教授法に関する研修会やサポート体制についての情報交換がなされ、本学でも同様の取り組みを本年度中にトライアル実施することとなりました。

今後とも各大学との連携を深めるとともに、本学のFD活動の改善・発展に努めて参ります。

「全国私立大学 FD 連携フォーラム（JPFF）」

2013年度に全国私立大学FD連携フォーラム（JPFF）へ加盟したことに伴い、2015年1月14日（水）に立命館大学東京キャンパスにて開催された「2014年度全国私立大学FD連携フォーラム ミーティング・懇談会企画」へ参加いたしました。懇談会企画では、大学でのFDに関連する取り組みの改善や今後の方針等を検討していくための機会として、「教学マネジメントからみたIRによる教育改善」「教育のオープン化に関する各大学の取組み」「学生・職員・教員の協働による学生参加型FDについて」の3つのテーマに分かれてグループディスカッションを実施し、グループごとの個別報告および情報共有を行いました。今後も他大学の事例やノウハウなどの情報収集や今以上の知識の蓄積と共有を行うことで、本学におけるFD活動の推進に役立てていきたいと思っています。

平成26年度 FD 推進センター活動報告 (平成 26 年 9 月～平成 27 年 2 月)

FD 推進委員会

◆第 4 回

●日 時：平成 26 年 9 月 27 日 (土) 10:00～12:00

報告 1 各学部活動状況報告

報告 2 センター長報告

- ①全学カリキュラム委員会主催
「カリキュラムマップ作成に向けたワークショップ」実施報告 (8/1)
- ②Teacher Workshop for the TOEIC Speaking and Writing Tests (8/5) 実施
- ③第 1 回部会長会議 (9/18)
- ④学生 FD チーム活動報告

審議 1 FD 推進センター規程の改正について
(学生 FD チームの位置付け、職員の委員会参画)

審議 2 一般教員 FD 研修会の開催について

審議 3 学部 FD 活動状況報告会の開催について

協議 1 教員が英語で授業を行うための FD

◆第 5 回

●日 時：平成 27 年 1 月 31 日 (土) 10:00～12:00

報告 1 各学部活動状況報告

報告 2 センター長報告

- ①全学カリキュラム委員会主催
『国際化に向けた科目ナンバリング作成
～単位互換と学習分析～』(11/21)
『～柔軟なアカデミックカレンダーを考える～クォーター制
(4 学期制) の導入と課題』(12/15)
- ②関東圏 FD 連絡会について 第 16 回 (10/1)、第 17 回 (1/28)
- ③弘前大学訪問調査への協力について (1/16)
- ④プリテッシュ・カウンシルとの意見交換について
- ⑤経営学部授業参観の取り組みへの参加について
- ⑥学生 FD チーム活動報告 (履修制度 (抽選制度・履修登録期間)
に関するアンケートにご協力いただいた学生への報告資料、学
生 FD フォーラム (10/4)、学生 FD サミット (12/20)、授業
の声コンクール)

審議 1 FD 推進センター規程の改正について
(学生 FD チームの位置付け、職員の委員会参画)

協議 1 授業評価アンケートの学生へのフィードバック方法の検討について

協議 2 教員が英語で授業を行うための FD
(経営学部授業参観、プリテッシュ・カウンシル、UCLA からの提案)

協議 3 平成 26 年度 FD 推進センター FD 推進委員会
活動の振り返りと課題抽出

部会長会議

◆第 1 回 ●日 時：平成 26 年 9 月 18 日 (木) 11:00～

議題 1 教員の語学力向上のための FD

議題 2 FD 推進センター規程の見直しについて
(学生 FD チームの位置付け、職員の委員会参画)

研修部会

◆第 3 回 ●日 時：平成 26 年 9 月 3 日 (水)

議題 1 平成 26 年度一般教員 FD 研修会の開催について

教育改善対策部会

◆第 3 回 (メール会議)

●日 時：平成 26 年 9 月 22 日 (月)～9 月 25 日 (木)

議題 1 「学部 FD 活動報告会」開催時期および内容の変更について

議題 2 「教育改善シンポジウム」の開催時期 (秋学期) の変更について

授業評価手法検討部会

◆第 3 回 (メール会議) ●日 時：平成 26 年 9 月 24 日 (水)

議題 1 平成 26 年度一般教員 FD 研修会の開催について

◆第 4 回 ●日 時：平成 27 年 1 月 9 日 (金)

議題 1 授業評価アンケート結果表の改善について
(グラフの表示方法、一定値を超える結果に対する完全必要度の基準
値の設定等について)

議題 2 授業評価アンケートに関する質問等の対応表およびよくある質問
Q&A の作成について

議題 3 学生への授業評価アンケート結果のフィードバック方法について

編集部会

◆第 3 回 (メール会議)

●日 時：平成 27 年 1 月 13 日 (火)～1 月 16 日 (金)

議題 1 FD ニュース第 15 号のコンテンツおよびスケジュールについて

学内公開活動

平成 26 年度一般教員 FD 研修会

●開催日時：平成 26 年 12 月 18 日 (木) 18:10～20:15

●会 場：125 記念ホール (白山キャンパス)

●参加対象：全教職員 (非常勤を含む)

●参加人数：35 名

●テ ー マ：大規模授業における双方向型授業の工夫と学習成果の測定・把握
～立命館大学 教育開発推進機構
教育開発支援センター長 沖 裕貴氏～
経済学部 TEES の取組み (e ラーニングを用いた双方向型授業)
～澤口 隆准教授・巽 靖昭助教～

全学カリキュラム委員会主催 (FD 推進センター共催) イベント

●開催日時：平成 26 年 11 月 21 日 (金) 10:40～12:10

●会 場：125 記念ホール (白山キャンパス)

●参加対象：全教職員

●参加人数：71 名

●テ ー マ：「グローバル化に向けた科目ナンバリング作成について」
～弘前大学 田中正弘氏～

●開催日時：平成 26 年 12 月 13 日 (土) 13:00～15:20

●会 場：6B14 教室 (白山キャンパス)

●参加対象：全教職員・学外者

●参加人数：87 名

●テ ー マ：～柔軟なアカデミックカレンダーを考える～クォーター制
(4 学期制) の導入と課題
～高知工科大学名誉教授 坂本 明雄氏・
早稲田大学グローバルデュケーションセンター所長
田中 愛治氏～